Japan Storytelling Network Newsletter No.90

NPO法人 全日本語り部ネットワーク

〒185-0021 東京都国分寺市南町2-18-3
国分寺マンションB－03A
(FAX)0237-67-7001 (HP)http://japankatarinet.jp/
(E-mail) welcome@japankatarinet.jp (振替)00130-2-114808

2023. 7. 2発行

ニュース

「震災を語り継ぐ―東日本大震災から12年―」

南三陸ホテル観洋　阿部憲子

東日本大震災から12年をむかえ、年月の経過とともに震災の教訓をどう語り継ぐかが各地の課題となっております。

私どもが南三陸ホテル観洋を構える南三陸の地においても、復興工事によって目まぐるしく変わっていた町並みに、観光を楽しむ人々が見られるようになりました。しかし、当ホテルが運行する『震災を風化させないための語り部バス』がひとたび町の中心部に出ますと、未だ復旧の最中にあり地域や災害の爪痕を今に伝える震災遺構を見ることができます。

語り部バスの前身となるバスが2011年4月に走り始めてから12年を迎え、乗車人数は累計43万人となりました。ホテルのリピーターのお客様は「何度乗っても初めて乗車した時の感情を思い出す」と仰る方もおられます。家族旅行で初めて語り部バスに乗車した小学生が、大学生になってもう一度訪れてくれたこともあり、12年の歳月を支えて下さった皆様に感謝するばかりでございます。

12年間被災地を走る語り部バスと同様に、民間震災遺構『高野会館(南三陸町)』と『命のらせん階段(気仙沼市)』の保存活動にも努めております。震災遺構と聞くと霊碑や追悼、悲劇的教訓の伝承といった役割を想像されるかと思いますが、この二つの震災遺構は民間の自助・共助によって人々の命を救った「防災・減災のあり方を伝える」遺構だと考えております。

海沿いにあった冠婚葬祭式場『高野会館』は4階近くまで浸水しましたが、当時のスタッフの「屋上へ逃げろ」という呼びかけにより避難した327人全員の命が助かりました。

当ホテルの本社『株式会社阿部長商店』創業者である私の父は、1960年のチリ地震の津波で多くの命を失ったことを教訓に、東日本大震災の5年前に自宅の屋上を避難場所とできるよう、外付けのらせん階段を設置しました。日頃から地域住民と避難訓練を行った結果、震災当日は約30 名の命を救い、『命のらせん階段』と名づけられました。現地に訪れた際には、津波の高さと人々を救うための活動や教訓を肌で感じて頂ければと存じます。

震災の教訓を後世に伝え、被災地を繋ぐために2016年から毎年開催している『全国被災地語り部シンポジウム』も、2023年3月に和歌山で第8回目を開催致しました。リモートではなく対面で交流する機会は参加者にとって久しい刺激と充足感、そして多くの学びの場となりました。被災各地のネットワークの構築により、継続的・多角的連携の拡大に努めております。かつては「被災地と未災地」という言葉もありましたが、今後は日本全体が災害列島として防災・減災を備えなければなりません。

高野会館

昨今は海外でも地震などの自然災害が増えているため、海外の方へ震災遺構や語り部の存在をもって自然災害の教訓を伝えることも重要視されています。コロナ禍を乗り越え、今一度人々が繋がることで伝承の力を高めるべく、今後も活動を継続して参ります。